対人関係における異文化適応のプロセス
―在日中国人を対象に―

張　氷穎

要旨

本稿では、質的調査の手法を用いて対人関係における異文化適応のプロセスについて分析を行った。本稿は、在日中国人 3 人を対象に「日本人との付き合いで感じた不安点や問題点」というトピックを中心に半構造化インタビューを行い、インタビューデータを分析することを通して異文化適応のプロセスを構成する 10 パターンをまとめた。結論として、ゲストがホスト国に滞在する際の対人欲求が、「集団的受動的欲求」「集団的能動的欲求」「個人的受動的欲求」「個人的能動的欲求」「集団的回避欲求」「個人的回避欲求」という 6 つに分かれることと、ホスト側の行動によってゲストが「対人欲求の妨害・充実」を感じていることが示唆された。異文化滞在の「対人欲求」に焦点を当てることを通して、量的調査のアプローチに焦点を当てた先行研究には見られなかった、異文化滞在者の心的活動の一端を明らかにすることができた。

キーワード：日本語教育，異文化適応，異文化接触，対人欲求，質的調査

1. イントロダクション

1.1 研究背景

グローバル化に伴い、留学や就職などを目的として国境を越えて移動する人々は年々増加している。青年期以降に海外へ出る人たちは、母国と文化が異なる環境で生活していく中、様々な困難を抱えているといわれている。それを如何に克服し、異文化の生活に適応していくかについては様々な研究がなされてきたが、適応のどこに焦点を当てるかによって研究の方向性が変わる。適応の「状態」に焦点を当てた研究においては、適応の指標が着目されてきたが、「プロセス」に焦点を当てた研究は、適応に影響する要因を探るものが多く、具体的には滞在期間のほか、ソーシャルサポート、ホスト[1]国に対するイメージなどがこの要因として挙げられている。しかし、ホスト国の文化と習慣に適応していても、周囲の人間関係に適応しているとは限らない。さらに、ゲストが具体的にどのように各要因から影響を受け、どのような心理的なプロセスを経てストレスを感じたのかはまだ明らかにされていない。

本稿は、異文化適応の「プロセス」に焦点を当て、在日中国人に着目し、対人関係における不安がどのような要因に影響されるかを検討し、それらの要因がどのようなプロセスを経てゲストの適応に影響を及ぼすかを見出すことを目的とする。

1.2 先行研究とその問題点

この節では、適応のプロセスに注目した研究を概観し、異文化適応の種類と、適応に影響する要因という 2 つの視点から先行研究を整理し、問題点を指摘する。

異文化適応には、肯定的な評価を伴う「適応」と、否定的な評価を伴う「強要された適応」の 2 種類がある。小柳（2006）はホスト文化の対人関係での差異に対するゲストの評価や感情を中心として、ゲストの行動パターンを 6 つに分けた。Shaules（2007）によると、異文化からの「適応要求」に対して、心理的に抵抗しながら適応する「強要された適応」（enforced adaptation）があるという。さらに、派遣教員の成長に注目した鈴木（2015）は、異文化適応では「肯定的な評価・感情」に基づく「ゲストの変化」と、「否定的な評価・感情」に基づく「強要されたゲストの変化」があると指摘している。

適応に影響する要因の中には、居住年数、ソーシャルサポート、ホスト国に対するイメージなどが挙げられている。Lysgaard（1955）では、「初期の表面的適応→孤独感を伴う不適応→滞在 1 年半過ぎた辺りでの適応」という「U 型カーブ」説が提唱されており、長期滞在が日本語力の上達と文化差の克服へと導き、それがさらに適応につながることが示されている。佐々木・水野（2000）は、外国人研修生を対象に縦断的分析を行い、その結果、学習・日本文化・住居と経済の 3 領域において、滞在期間が長くなるにつれ、適応得点が高くなることを指摘している。また、田中（1998）は、在日留学生を対象とし、ソーシャルサポートと精神的健康の間で正の関係を見出し、それが適応につながると示唆している。葛（2019）は中国人留学生の対日イメージ尺度と適応尺度の相関関係を検討した結果、「日本人の親和性への評価が高い留学生ほど、対日感情がポジティブで、対人関係がうまくいっていた」という結論を出している。

しかし、先行研究には留学生に焦点を当てたものが多く、社会人としての外国人に注目したものは少ない。留学生の滞在期間には限りがあり、留学生だけに注目して居住年数の影響を考察するのは限界があると考えられる。一方で、卒業後そのまま日本で就職して社会人になる留学生も少なくない。よって、「留学生」と「社会人」を性質の異なる 2 つのグループとして別々に考察するより、在留外国人のライフコースの 2 つの段階と見なしたほうが異文化適応の実態をよりよく把握できるであろう。

また、先行研究には外国人のホスト国への全体的な適応を考察したものが多く、1 つの領域に着目して調査したものが少ない。適応にもたくさんの領域があり、領域によって適応度が異なると山本ほか（1986）などにも指摘されている。したがって、領域別に考察し、先行研究の結論を再検討する必要があると考えられる。

さらに、先行研究では各要因と適応の間に相関関係が見られたが、各要因がそれぞれ適応にどのように影響を与えるかというプロセスはまだ解明されていない。小柳（2006）と鈴木（2015）は質的調査の手法を採用したが、異文化適応のプロセスについては明らかになっていない。したがって、改めて質的手法を通して適応プロセスを再構築することも必要であろう。

1.3 リサーチ・クエスチョン

本稿は、先行研究の問題点を克服するべく、滞在歴の異なる在日中国人を対象に、対人関係の適応に焦点を当て、様々な要因が適応にどのような影響を及ぼしているかを説明できるような適応プロセスを構築することを目指し、以下の 2 つのリサーチ・クエスチョンに取り込む。

①異文化接触における不適応がどのようなプロセスで発生するのか。

②対人関係における異文化適応がどのような要因に影響されるか。

このように、本稿は先行研究で提示された要因の影響を再検証すると同時に、対人関係における異文化適応のプロセスを明らかにすることを目的とする。対人関係に注目したのは、在日中国人を分析するうえで不可欠だと考えられたからである。岩男・萩原（1997）は、アジア系留学生は欧米系留学生と比較して、日本人の親和性を有意に低く評価していると指摘し、葛（2019）は「日本人の親和性を高く評価する人ほど対人関係がうまくいっている」と指摘している。よって、アジア系留学生は対人関係の適応では大きな困難を抱えていることが予想できる。

2. 研究方法

本稿では、滞日期間がそれぞれ 3 年、5 年、11 年の在日中国人 A さん、B さん、C さんを対象とし、リモート会議アプリケーションの Zoom 上で半構造化インタビューを実施した（表 2.1）。B さんと C さんは 2 人とも、留学後そのまま日本で就職した社会人である。C さんは高い日本語力を持ち、インタビューは日本語で行われたが、A さんと B さんは日本語力に支障を感じているため、インタビューは中国語で行われた。以下の例で示される A さんと B さんの語りは、筆者によって日本語訳されたものである。

表 2.1　協力者の情報

名前	性別	滞日期間	身分	インタビューの詳細
A さん	男性	3 年	大学院生	インタビュー50 分＋追加インタビュー10 分
B さん	女性	5 年	会社員	インタビュー40 分
C さん	男性	10 年	会社員	インタビュー50 分＋追加インタビュー5 分

本インタビューでは、東京大学社会科学研究所附属社会調査・データアーカイブ研究センターSSJ データアーカイブから個票データの提供を受けた「在留外国人に関する調査，2020（寄託者：サーベイリサーチセンター）」の調査票を使用した。具体的な流れとして、まず当調査票の問 25、「日本人との付き合いの中で感じる不安や問題点」（表 2.2）を見せ、「該当する不安点の枠にチェックマーク〇を付けてください」と指示し、その後、その不安に関わる具体的なエピソードや心的活動を語ってもらった。

表 2.2　日本人との付き合いの中で感じる不安や問題点（複数選択）

言葉が通じない		共通の話題が少ない	
付き合うきっかけが少ない		近所に日本人が住んでいない	
日本の文化や習慣がわからない		差別的な雰囲気を感じる	
文化や習慣の違いを理解してもらえない		日本人の方が近づいてこない、避けられている	
その他			

分析方法は、分析的帰納法[2]を採用し、まずインタビューの中で対人関係の適応に関わるエピソードを拾い出して切片化・概念化した。それぞれの概念を規定するに際しては小柳（2006）[3]を参考に、「各事象をどう捉えているか」という「認識」、「自分とホストがどう振る舞うか」という「行動」、「各対人交流の出来事をどう感じているか」という「評価・感情」、という 3 側面に焦点を当て、カテゴリーにまとめた。また、先行研究の理論と合わせて詳しく考察したうえ、「概念間の関係」を説明できるような仮説を立てた。次いで、2 つ目のエピソードを考察して仮説を修正し、さらに 3 つ目のエピソードを検討し、概念のリネームと仮説の修正を繰り返した。

3. 考察

3.1 各カテゴリーや概念

Brown & Levinson（1987）のポライトネス理論によると、人間の基本的な欲求には、他者と距離を保ちたいネガティブ・フェイスと他者に近づきたいポジティブ・フェイスがあるが、今回の調査で得られた仮説では、対人関係における欲求はさらに所属集団の一員としての欲求と個人としての欲求に分けられ、ポジティブ・フェイスはさらに「受動的」と「能動的」に分けられる。よって本稿は、「対人欲求」というキーワードを取り上げ、ゲストがホスト国に滞在する際の対人欲求は以下の 6 つに分かれる、という仮説を立てた。この中で、①～④と⑤～⑥は、それぞれポジティブ・フェイスとネガティブ・フェイスの概念を、筆者がさらに下位分類して提案したものである。

① 集団的受動的欲求：所属集団の一員として、外グループからの理解や働きか

けてくれることを期待する欲求

② 集団的能動的欲求：所属集団の一員として、外グループに当集団の情報を伝え、外グループに働きかけようとする欲求

③ 個人的受動的欲求：個人として、他者からの理解や働きかけてくれることを期待する欲求

④ 個人的能動的欲求：個人として、他者に意思を伝達し、他者に働きかけようとする欲求

⑤ 集団的回避欲求：所属集団の一員として、外グループと距離を保ち、外グループに影響されたくない欲求

⑥ 個人的回避欲求：個人として、他者と距離を保ち、他者に影響されたくない欲求

本稿では、「評価・感情」という側面を、「対人欲求」の充実・妨害に関わるものと捉え、《否定的な評価・感情を伴う対人欲求の妨害》と《肯定（中立）的な評価・感情を伴う対人欲求の充実》という 2 つのカテゴリーに分けた。そのほか、「認識」という側面には《ゲスト側の状態への認識》《ホスト側の行動への意味付与》という 2 つのカテゴリーがあり、「行動」という側面には《ホスト側の行動》《ゲスト側の行動》《現状維持》という 3 つのカテゴリーがまとめられた。生成された各カテゴリーとその中に含まれている概念は表 3.1 に示す。

表 3.1　カテゴリーと概念一覧

	カテゴリー	概念
評価・感情	《否定的な評価・感情を伴う対人欲求の妨害》	〈集団的受動的欲求の妨害〉〈個人的受動的欲求の妨害〉〈集団的能動的欲求の妨害〉〈個人的能動的欲求の妨害〉〈集団的回避欲求の妨害〉〈個人的回避欲求の妨害〉
	《肯定（中立）的な評価・感情を伴う対人欲求の充実》	〈集団的受動的欲求の充実〉〈個人的受動的欲求の充実〉〈集団的能動的欲求の充実〉〈個人的能動的欲求の充実〉〈集団的回避欲求の充実〉〈個人的回避欲求の充実〉
認識	《ゲスト側の状態への認識》	〈言語能力への認識〉〈外的環境への認識〉〈精神状態への認識〉
	《ホスト側の行動への意味付与》	〈集団行動〉〈個人行動〉〈状況のせいによる行動〉
行動	《ホスト側の行動》	〈ゲストが直面したホスト行動〉〈ゲストが見聞きしたホスト行動〉
	《ゲスト側の行動》	〈ホスト側に対する行動〉〈ゲスト自身に対する行動〉
	《現状維持》	〈現状維持〉

本稿は、カテゴリーと概念間の関係をデータから考察したうえ、異文化適応のプロセスには「ゲスト側が自身の状態を認識する際」の 4 パターンと「ゲストがホスト側から影響を受ける際」の 6 パターンがある、という仮説を立てた（図 3.1）。

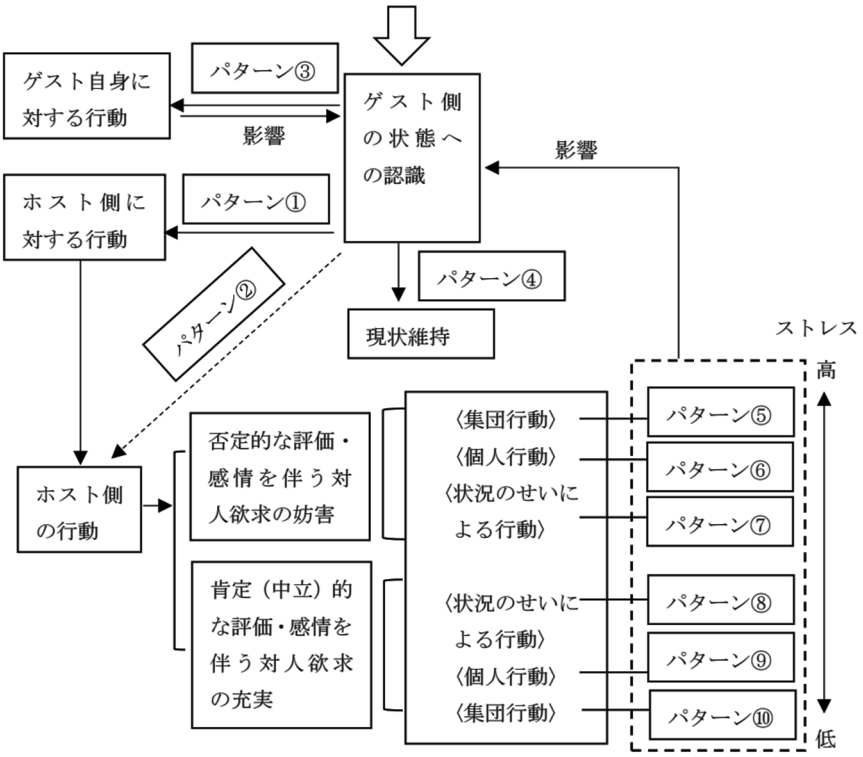

図 3.1　対人関係における異文化適応のプロセス

図 3.1 では、実線の矢印（→）は「前者が後者を導き出す」という関係を意味し、点線の矢印（⇢）は「前者の後に後者が起こる」という前後関係を示し、左右矢印（↔）はストレスの度合いを表している。具体的なプロセスとして、まずゲスト側には、《ゲスト側の状態への認識》があり、そこから、ゲストが①ホストに対して行動する、②特に行動せず、ホストの行動に直面する、③自分自身に対して行動する、④《現状維持》を選ぶ、という 4 パターンがまとめられた。

パターン①とパターン②では最後に《ホスト側の行動》に直面することになるが、その行動から影響を受ける際のエピソードを、1. その行動によって対人欲求が妨害されるか／充実しているか、2. その行動を集団行動と見なすか／個人行動と見なすか／状況のせいにするか、を基準にして分類し、さらに 6 パターン（⑤～⑩）がまとめられた。以下では、具体例を示しながら、各パターンについて説明する。

3.2 ゲスト側が自身の状態を認識する際の 4 パターン

パターン①　《ゲスト側の状態への認識》→〈ホスト側に対する行動〉→《ホスト側の行動》

このパターンは、ゲストがまず自分自身の状態をある程度把握し、ホスト側に対して行動を行い、その結果、相手から行動を返した場合を指す。

「例えば、会社によってもしかすると、社員の間の親睦？あるいはイベントとかを起こしたりすることはあるんですが、自分の会社はなかったんですね。なので、日本の方との付き合いは全部自分でやるしかないんです。（中略）まず、勇気を出して話しかけることは大事なんですよ。逆に遠ざけられることもあるんですけど、もしかすると礼を返してくれる方もいるかもしれないです。」（C さん）

C さんは、自分の会社では日本人との付き合いの機会が少ないという〈外的環境への認識〉をしたうえ、日本人との付き合いを自分でやるしかないと述べ、「勇気を出して話しかける」という〈ホスト側に対する行動〉をとり、そこから「逆に遠ざけられる」「礼を返してくれる」というような《ホスト側の行動》が返される。そのような《ホスト側の行動》に、C さんはさらに影響を受け、「逆に遠ざけられる」ことに〈個人的能動的欲求の妨害〉を感じたり、「礼を返してくれる」ことに〈個人的能動的欲求の充実〉を感じたり、パターン⑤～⑩を導き出したりすることになる。

パターン②　《ゲスト側の状態への認識》→《ホスト側の行動》

このパターンでは、ゲストが自分がどのような状態に置かれているかを認識しているが、それに対して特に行動せず、ホスト側からの働きかけを一方的に受けている。

「自分は仕事能力が高いんだけど、日本語レベルが高くないって職場の日本人たちも分かっているので、すごく気遣いをしてくれるんですよね。話のスピードを下げて何回も繰り返したり、ミーティングの後で『わからないことありますか』って聞いてくれたり、外国人に包容力がある人が多いんです。」（B さん）

B さんは、〈言語能力への認識〉を経て、自分の日本語レベルが高くないと把握している。そこで、職場の日本人から、話のスピードを下げたり積極的に確認したり、というような気遣いを受けた（パターン②）。その気遣いに B さんは〈集団的受動的欲求の充実〉を感じ、外国人に包容力がある人が多いと好感を抱いた（パターン⑩）。

パターン③　《ゲスト側の状態への認識》→〈ゲスト自身に対する行動〉

このパターンは、ゲストが自分の状況を認識したうえ、その状況を変えるために自分自身に対して行動することを指す。

「1 回就職が決まって就職したのですが、ブラック企業に入ってしまったんです。その場合、軽くうつになってたんですね。（中略）勇気を出してさらに再就職して、なんとなくそういうブラック企業の闇から抜け出したんです。（中略）今はストレスがそんなにたまってないですからね。」（C さん）

C さんは、修士課程を卒業してから 1 回就職が決まって就職したが、ブラック企業に入り、精神状態が悪化した。そこから「軽くうつになっている」という〈精神状態への認識〉があり、勇気を出して再び就職活動に参加するという〈自身に対する行動〉を行った。その結果、ようやく「ブラック企業の闇から抜け出し」、「今はそんなにストレスたまっていない」という〈精神状態への認識〉を更新した。

パターン④　《ゲスト側の状態への認識》→《現状維持》

このパターンでは、ゲストが自分の状況を認識したが、他者にも自分自身にも働きかけることがなく、《現状維持》を選ぶことを指す。

「日本に来たらさらに内向的になったような気がします。国内にいた時は話しかけてくれる友達が多いのが原因なんじゃないかな？（中略）今だと、一人でいたいという時が多くなって、（中略）基本『ほっといて』という気持ちが大きいですかね。（中略）でもたまに感傷的になることもあって、（中略）急に寂しくなって友達がほしくなる時もあるんです。」（A さん）

A さんは、日本に来て、働きかけてくれる日本人がいないという《ホスト側の行動》から〈個人的受動的欲求の妨害〉による不適応を覚えた。その不適応が《ゲスト側の状態への認識》に影響を及ぼし、「ほっといて」という気持ちを感じたり、寂しく感じたりしたが、現状を変えることを選ぶことなく、一人でいることを選んだ。

3.3 ゲスト側がホスト側から影響を受ける際の 6 パターン

Brislin（1981）は異文化コミュニケーションの 2 つの意味付与パターンを提唱し、人々は、自分が属さない外的グループの人の好ましくない行動をその人のマイナスな性格・特性と見なし、好ましい行動を状況のせいにするという傾向があると指摘した。本稿では、インタビューデータに基づき、「意味付与されるホスト側の行動」を〈個人行動〉〈集団行動〉〈状況のせいによる行動〉という 3 つに分け、ホスト側から影響を受ける際の 6 パターンを抽出した。

パターン⑤　《ホスト側の行動》→《否定的な評価・感情を伴う対人欲求の妨害》→《ホスト側の行動への意味付与》が〈集団行動〉

パターン⑤は、ホスト側の行動を、ホストメンバーの共通特性・性格として捉え、かつその行動に対人欲求の妨害を感じる場合を指す。

「上司だった人に、僕はパワハラされたんですね。（中略）当時、相手の方が『お前ら中国人なんだ』っていう話があったんですね。だから、中国人だからですか？って言われると『中国人』という単語が出たからおそらくそうでしょうけど、ほかの国の人の場合は知らない。」（C さん）

ここでは、上司だった人に中国人という理由でパワハラされ、相手が中国のことを理解してくれていないことを認識することによって、〈集団的受動的欲求の妨害〉が発生し、中国人（所属集団）の一員として、日本人（外グループ）からの理解を期待したが、その欲求が妨害され、不安を感じることになる。また、この点について、C さんは「社会に出たらこういう日本人に出会うことがしょっちゅうある」と述べ、このような「差別行動」を集団行動と見なしている。この場合、C さんは日本人に対するイメージが悪化し、たとえ「日本の方は、いいところが非常に多くあります」と評価しても、「中国を差別する日本人は大多数」というイメージを抱いている。

パターン⑥　《ホスト側の行動》→《否定的な評価・感情を伴う対人欲求の妨害》→《ホスト側の行動への意味付与》が〈個人行動〉

パターン⑥は、ホスト側の行動を、その人にしか見られない特性・性格として捉え、かつその行動に対人欲求の妨害による否定的な評価や感情を抱く場合を指す。この場合、日本人に対するイメージが悪化せず、まわりの日本人ホストとその人に関する愚痴を言ったりすることで、ストレスを発散することもできる。

「（Q：ほかに差別的な雰囲気を感じるところがありますか？）あと自分の先生ですね。自分の場合はまだましなんですけど、うちのゼミでは日本語レベルが高くない韓国の方がいて、（中略）たくさん意地悪な質問をされたりはしていました。（中略）日本人の発表は質疑応答を含めて 1 時間半で終われるんですけど、彼女の場合は 3 時間以上かかります。」（A さん）

「うちの先生は本当に特例なんですよ。学会発表の時は、やっぱり優しい先生が多くて、外国人だからこそ厳しくする、そういう例が少ないかな。彼は日本人学生からも変人と思われたりしています。」（A さん）

「（日本人友達とは）最初は日常だったりアニメだったり、指導教員の先生につい

て突っ込んだりしていただけなんですけど、段々下ネタも話せるようになって、共通の話題が多くなったんですね。」（A さん）

A さんは、指導教員からの韓国人同級生に対する行動を見て（パターン②）、日本人学生との比較を通し、それが差別であると認識した。この場合、〈集団的受動的欲求の妨害〉が引き起こされ、外国人の一員として、日本人からの平等の働きかけを期待していたが、期待外れによって差別的な雰囲気を感じた。ただし、A さんは指導教員の先生の行動をあくまでもその先生の〈個人行動〉として捉えており、したがってこの先生の行動に接しても、日本人全体に対するイメージが悪化しているわけではない（パターン⑥）。さらに、A さんは指導教員についてほかの日本人学生と一緒に愚痴を言ったりすることもでき、パターン⑤よりストレスが低いと推測できる。

パターン⑦　《ホスト側の行動》→《否定的な評価・感情を伴う対人欲求の妨害》→《ホスト側の行動への意味付与》が〈状況のせいによる行動〉

このパターンでは、ゲストはホスト側の行動に対して否定的な感情を持ち、かつその行動を状況のせいだと意味付与する。

「たまに中国語っぽい考え方で話をして、漢字とかそのまま音読みで言ったら、相手の日本人に『うん？』って反応されて、（中略）その時は『もう 1 回いいですか』って聞かれて、元々話すのは嫌だから、もうちょっと詳しく説明することを求められるともっと嫌になります。（中略）たくさん話したらちょっと疲れる感じっていうか。深く接触したくないです。」（A さん）

A さんはホスト側に意思伝達をしたとき、相手に分かってもらえず、「もう 1 回いいですか」と聞かれた（パターン②）。その時、A さんは「より詳しい説明」を強要され、疲れを感じた。そこで、A さんは〈個人的回避欲求の妨害〉に直面し、否定的な感情を感じたが、「相手の発言の意味が分からないという状況においては、誰でも『もう 1 回いいですか』と聞くものだ」とも思っているため、あくまでも〈状況のせいによる行動〉と見なしており（パターン⑦）、対日イメージが悪化していない。

パターン⑧　《ホスト側の行動》→《肯定（中立）的な評価・感情を伴う対人欲求の充実》→《ホスト側の行動への意味付与》が〈状況のせいによる行動〉

このパターンでは、ゲストはホスト側の行動に対して肯定（中立）的な評価・感情を持ち、かつその行動を状況のせいだと意味付与する。

「東京に来て、ちょっとイメージが変わったんです。東京だと、人と人との間ですごく距離感が感じられて、社会人になったのも1つの原因かもしれないんですけど、お話する時は距離感を保ちながら慎重にならなければいけないんです（中略）多分学生から社会人になったからかな？」（Bさん）

「どっちが本音どっちが嘘なのか分からない時は疲れるから、逆に距離感があったほうが、あまり相手に影響されなくて、楽だと思います。」（Bさん）

Bさんは、北九州の大学院を卒業し、東京で就職したが、日本人が話したことを本音か嘘かを判断したくなく、深い関係を持ちたくないため、その距離感について逆に適応していると感じた。その場合、ホスト側の距離感を保つ行動によって〈集団的回避欲求の充実〉は喚起され、Bさんは日本人と深い関係を持たないという状況に適応している。また、Bさんは「距離を保つ」という行動を日本人、または東京に住む日本人の特性と見なすより、「社会人になった」という理由が大きいと考え、ホスト側の行動をまわりの状況のせいだと意味付与した。この場合、ホスト側に対するイメージが変わったが、〈状況のせいによる行動〉として理解しているため、いい意味の変化でも悪い意味の変化も起こらず、対日イメージの好転・悪化というところに至らない。

パターン⑨　《ホスト側の行動》→《肯定（中立）的な評価・感情を伴う対人欲求の充実》→《ホスト側の行動への意味付与》が〈個人行動〉

パターン⑨は、ホスト側の行動を、その人の特性・性格として捉え、かつその行動に肯定（中立）的な評価・感情を抱く場合を指す。この場合、対日イメージは変化せず、適応の状態が維持されたり、不適応が改善されたりする。

「結構まっすぐな性格をしていますね。なんか、日本人っぽくない。」（Aさん）

「（Q：仲良くなったきっかけは何ですか？）その人が僕と同じゲームをしているところを見て、彼の隣でそのゲームに関する話をしながらゲームしていたところを見てました。（中略）で、その方の休憩室の席は僕の後ろで、よく話しかけてくれるんですよね。」（Aさん）

「日本に来たばかりの頃に知り合った方なので、むしろ彼と知り合って以降、ほかの日本人と接触する時は慣れていないところが多いかもしれません。（中略）日本人はみんなそういう感じなのかなと思ったんだけど、特例でしたね」（Aさん）

Aさんは、ゼミの日本人が自分と同じゲームしているところを見て、相手と関係を持とうという欲求が湧き、ゲームの話題で話しかけてみたら（パターン①）、それが仲良くなるきっかけとなった。その時、〈個人的能動的欲求の充実〉があり、他者に自己開

示し、働きかけたいという希望が相手に理解してもらえ、両者の距離が縮まった。それ以外に、〈個人的受動的欲求の充実〉もあり、向こうがよく話しかけてくれたこと（パターン②）に好印象を持ち、その行動を個人行動と見なし、「日本人っぽくない」と評価している（パターン⑨）。ただ、A さんはその友人と知り合ったのは来日したばかりの頃であり、最初はその行動を集団行動として捉え、適応が維持されたが、その人が卒業して以来、その行動を個人行動として捉えなおした。

パターン⑩　《ホスト側の行動》→《肯定（中立）的な評価・感情を伴う対人欲求の充実》→《ホスト側の行動への意味付与》が〈集団行動〉

「中国国内だと、不満と感じるところが多くて、車を運転している時に知らない人に叱られたり、電車の中でもぐもぐ食べている人に嫌な思いをしたり、それと比べて日本のほうがマナーがいい人が多くて、他人に迷惑をかけないようみんな心がけているんです。（中略）（日本で生活したい理由は）個人的には、生活の面では（中国より）日本のほうに適応しているからかな。」（B さん）

B さんは、人に迷惑をかけないようにする《ホスト側の行動》に直面し（パターン②）、〈個人的回避欲求の充実〉が引き起こされ、自分が他者に迷惑をかけられない状態に満足しており、かつ他者に迷惑をかけないという行動を集団行動として捉えている（パターン⑩）。その結果、B さんのストレスが低く、日本での生活に適応していると感じていると考えられる。

3.4 総合考察

本稿では、インタビューデータを分析することを通して、ゲスト側が自身の状態を認識する際の 4 パターンとホスト側から影響を受ける際の 6 パターンをまとめた。

ゲスト側が自身の状態を認識する際の 4 パターン

①《ゲスト側の状態への認識》→〈ホスト側に対する行動〉→《ホスト側の行動》

②《ゲスト側の状態への認識》→《ホスト側の行動》

③《ゲスト側の状態への認識》→〈ゲスト自身に対する行動〉

④《ゲスト側の状態への認識》→《現状維持》

ゲスト側がホスト側から影響を受ける際の 6 パターン

⑤《ホスト側の行動》→《否定的な評価・感情を伴う対人欲求の妨害》→《ホスト側の行動への意味付与》が〈集団行動〉

⑥《ホスト側の行動》→《否定的な評価・感情を伴う対人欲求の妨害》→《ホスト側の行動への意味付与》が〈個人行動〉

⑦《ホスト側の行動》→《否定的な評価・感情を伴う対人欲求の妨害》→《ホスト側の行動への意味付与》が〈状況のせいによる行動〉
⑧《ホスト側の行動》→《肯定（中立）的な評価・感情を伴う対人欲求の充実》→《ホスト側の行動への意味付与》が〈状況のせいによる行動〉
⑨《ホスト側の行動》→《肯定（中立）的な評価・感情を伴う対人欲求の充実》→《ホスト側の行動への意味付与》が〈個人行動〉
⑩《ホスト側の行動》→《肯定（中立）的な評価・感情を伴う対人欲求の充実》→《ホスト側の行動への意味付与》が〈集団行動〉

これらのパターンが「どのように連鎖していくか」については以下の特徴が見られる。まず、パターン①～②がパターン⑤～⑩を引き起こし、パターン⑤～⑩はさらに《ゲスト側の状態への認識》に影響を及ぼす。パターン③はパターン⑤～⑩を引き起こさないが、3.2 節で挙げた例のように、直接《ゲスト側の状態への認識》に影響を及ぼすことになる。このように、《ゲスト側の状態への認識》が何度も更新され、パターン④、つまり《現状維持》に至るまでの循環プロセスが繰り返される状況が見られる。循環には至らなかった例として、パターン⑩の説明で取り上げた B さんの例がある。B さんは人に迷惑をかけないようにする《ホスト側の行動》を見て、〈個人的回避欲求の充実〉を感じており、かつそれを〈集団行動〉として捉えている。その結果、B さんが日本での生活に適応していると感じており、その適応感が《ゲスト側の状態への認識》に正の影響を与えている。さらに、そのうえ《現状維持》を選び、「パターン②→パターン⑩→パターン④」という流れが示されている。

循環を起こした例として、パターン⑦の説明で取り上げた A さんの例がある。A さんはホスト側に何かを伝えようとする時、相手に「もう 1 回いいですか」と説明を要求されたことに否定的な感情を抱いた（パターン①→パターン⑦）。その感情が《ゲスト側の状態への認識》に影響を及ぼし、A さんは自分自身の日本語力が高くないことを改めて認識している。

「日本人とは距離感があると思います。普通はアニメだったりゲームだったり、たまに研究の話もしてるんですけど、それ以外の話題があまりないんですね。でも、日本人同士の話を聞くと、株とか、麻雀とか、後は旅行の話とか、小学校・中学校の話とかもあったりして。（中略）その時は『向こうはあまり中国人と話したくないのではないか』と思ったんです。（中略）（Q：もうちょっと話したかったんですか？）日本語を練習したくて、もっと話したかったんです。」（A さん）

「最初は日本語を練習したくてもっとコミュニケーションしたいですけど、よく考えてみると、日本人としか日本語を練習できないことはなくて、韓国人との間でも日本語を使ったりはします。」（A さん）

日本語力が高くないという状態を認識し、A さんはホスト側からの働きかけを期待したが、日本人との間に距離を感じており、「旅行の話」などをしてくれなかったことに不満を抱き、直面した状況を「向こうはあまり中国人と話したくない」と解釈している。この場合は、〈集団的受動的欲求の妨害〉を感じたということである（パターン②→パターン⑤）。さらに、この否定的な感情が《ゲスト側の状態への認識》に影響を及ぼし、「韓国人との間でも日本語を使ったりする」という〈外的環境への認識〉が覚醒され、「現状維持」を選んだということになる。A さんの場合には、パターン①から出発し、パターン⑦が引き起こされ、さらにパターン②が続くという連鎖プロセス「パターン①→パターン⑦→パターン②→パターン⑤→パターン④」が見られる。

面白いことに、A さんも B さんも自分の日本語レベルに不安を感じているが、両者の不安の理由は異なる。A さんの理由が「たくさんコミュニケーションしたら疲れる」ということであるのに対して、B さんの理由は「相手が理解したことと自分が意味していたこととは違う」「うまく伝えなかったことが気になる」ということである。〈個人的回避欲求の妨害〉に直面した A さんとは異なり、B さんは〈個人的能動的欲求の妨害〉に直面し、意思疎通ができず、自己開示が失敗したことにストレスを感じている。

また、全体からみると、3 人の中、パターン⑩に一番多く（3 回）言及した B さんは、中国より日本に住みたいという態度を見せる一方、パターン⑤に一番多く（3 回）言及した A さんは「将来は日本にいても中国にいてもよいが、チャンスがあれば帰国したい」という意志を示している。C さんはパターン⑤について 3 回言及したが、パターン⑩にも 1 回言及したため、「両方住みたい」「行ったり来たりしたい」と述べた。

4. 先行研究の再検討と今後の課題

まず、先行研究によると、異文化適応の種類には肯定（中立）的感情・評価を伴う「適応」と否定的な感情・評価を伴う「強要された適応」があるが、本稿では「適応」のプロセスを、《現状維持》に至るまでのプロセスと見なしている。そのプロセスにおいて、肯定（中立）的感情・評価と否定的な感情・評価が同時に存在する場合もあり、必ずしもどちらに偏るということはない。パターン④の説明で示されていた A さんの例では、A さんは日本人が話しかけてくれないことに〈個人的受動的欲求の妨害〉を感じて、「たまに寂しくなる」という否定的な感情を抱いたが、一方、「一人でいたいという時が多い」「基本『ほっといて』という気持ちが大きい」という語りもあり、〈個人的回避欲求の充実〉による中立的な感情もあった。よって、一人でいることに対して《現状維持》を選んだ A さんの例には、多少「寂しい」という否定的な感情が見えたが、それは「強要された適応」とはいえない。

次に、先行研究で取り上げられた影響要因「居住年数」「ソーシャルサポート」「ホスト国に対するイメージ」に、C さんの語りに見られた「差別的な経験」を加え、本稿

の結果で説明することを試みる。「ソーシャルサポート」は、ゲストの言語能力とホスト側の行動への評価・感情に影響を与える。言語能力の場合は、今回は具体例を示さなかったが、C さんには「日本語がうまく話せなかった時期に日本語を教えてくれる」日本人の知り合いがいて、その人がCさんの日本語力の向上に正の影響を与えた。ただ、日本語力の低さは不適応をもたらす直接的な要因ではない。日本語力が低い場合、ゲストが、ホスト側と日本語でコミュニケーションすることによって《否定的な評価・感情を伴う対人欲求の妨害》に遭遇し、ストレスを感じることになる。したがって、日本語力の向上は《肯定（中立）・感情を伴う対人欲求の充実》を起こし、以前日本語力が低かったことによる不適応を改善することができる。「ホスト側の行動への評価・感情」の場合、「ソーシャルサポート」としてホスト側がゲストに働きかけた結果、ゲストが〈集団的受動的欲求の充実〉や〈個人的受動的欲求の充実〉を感じており、それが適応に正の影響に与えることになる。

ゲストがホスト側から「差別的な経験」を受ける場合は、ゲストが〈集団的受動的欲求の妨害〉と〈集団的能動的欲求の妨害〉を感じ、否定的な評価・感情が芽生えることによって、ストレスの高い状態を迎えることになる。

「ホスト国に対するイメージ」は、適応に影響する要因の 1 つではあるが、適応のプロセスにおいてそのイメージは変容する可能性があり、変容したイメージがまた次の段階の適応に影響する。日本人の行動に対人欲求が妨害され、さらにその行動を〈集団行動〉と見なした結果、対日イメージが悪化することになる。逆に、〈集団行動〉と見なした日本人の行動に対人欲求の充実を感じた場合、対日イメージが好転することになる。その行動を〈個人行動〉または〈状況のせいによる行動〉と見なした場合、たとえ対人欲求の妨害・充実を感じたとしても、対日イメージの悪化・好転には至らない。一方、変化した対日イメージが《ゲスト側の状態への認識》を更新することで、さらに適応のプロセスに影響することもある。よって、「ホスト国に対するイメージ」は、適応の結果でもあり、適応に影響する要因でもある。

最後に、「居住年数」が直接適応に影響するのでなく、滞在期間が長くなることによって「ゲスト自身の言語能力の向上」「ゲストが接触したホストメンバーの数の増加」がもたらされ、結果として「間接的に」適応プロセスに影響を与える。言語能力については、ゲストがホスト側、またはホスト国に滞在しているほかの外国人とコミュニケーションしなければいけないという環境に置かれることにより、たとえ言語の学習が苦手な人でも、ホスト国への滞在期間が長くなるにつれ、自然習得が進み、その結果、日本語レベルの向上が適応につながる。接触したホストメンバーの数については、日本に滞在する期間が長ければ長いほど多くの日本人に接触することになり、その結果《ホスト側の行動への意味付与》に影響を及ぼしている。ゲストが日本に来て間もない時期には、接触した日本人の行動を〈集団行動〉と見なす場合が多い。一方ホストメンバーとの接

触が多くなると、ホスト側の行動を〈集団行動〉と見なすか〈個人行動〉と見なすかの判断に揺れが生じるようになり、A さんのように、もともと〈集団行動〉として捉えていた日本人の友人の行動を、時間の経過とともに〈個人行動〉として捉えなおす場合もある。ホスト側の行動に対し、肯定（中立）的な評価・感情を持ち、かつそれを〈集団行動〉として捉えた場合、C さんのように日本人全体を高く評価し、「職場で日本語が分からなくてもみんな優しくしてくれる」「将来は中国より日本で生活したい」というように、ストレスの低い適応状態を迎える。

以上、本稿では、3 人の在日中国人を対象にインタビューを行った結果、対人関係における異文化適応のプロセスを示し、ゲスト側が自身の状態を認識する際の 4 パターンとホスト側から影響を受ける際の 6 パターンを提案した。対人関係における異文化適応を影響する要因を、《否定的な評価・感情を伴う対人欲求の妨害》と《肯定（中立）的な評価・感情を伴う対人欲求の充実》という 2 つのカテゴリーで捉えている。それに基づき、先行研究で取り上げられた「影響要因」を再検討した。ただし、今回の協力者が 3 人しかいないため、さらに事例を増やして仮説を検証していくのが今後の課題である。具体的な進め方としては、まず本稿の結果に基づき、在日中国人の対人関係における不安点をまとめたうえアンケートを作成し、量的調査で異文化適応と関連する要因を見出すことを予定している。そのうえ、さらに質的調査の協力者を増やし、量的調査の結果に基づいて質問項目を工夫し、要因間の交互作用も見られるように、対人関係における異文化適応のプロセスをさらに明らかにすることを目指す。

謝辞

本稿の執筆にあたり、指導教官として終始多大なご指導を賜った、東京大学大学院総合文化研究科の宇佐美洋先生に深く感謝申し上げます。

註

1 本稿では、異文化滞在側を「ゲスト」と呼び、受け入れる側を「ホスト」と呼ぶ。

2 ズナニエッキー（1971）は帰納主義の立場から方法論を展開し、帰納法を「多くの事例から類似した性格を探し出し、本質的な性格を抽象化する」列挙的帰納と、「ある具体的な事例から本質的な性格を抽象化し、本質である以上それがほかの事例にも当てはめると推定する」分析的帰納に分けた。その後、分析的帰納法の手順がマーティン（2022）などに改定され、おおむね①説明されるべき事象を定義し、仮説を立てる、②ほかの事例を仮説の観点から研究し、仮説が事実に適合するかどうかを考察する、③仮説が事実に適合しなければ、その事例が除外されるように仮説を作り直すか、説明されるべき事象を再定義する、という流れになっている。

3 小柳（2006）は留学生が語った対人関係のエピソードを拾い出し、その中から「認識」「評

価」「感情」「行動」の 4 側面を抜き出してコード化し、「留学生は、ホストとの対人交流の出来事をどのように認識し、評価し、どのような感情を経験し、行動をとるか」を分析することによって、文化規範の理解プロセスやパターンを明らかにした。小柳は、「評価」と「感情」を生起順序が異なる 2 つの側面として捉えたが、本稿では「評価・感情」という 1 つの側面に統合している。「評価」と「感情」には確かに違いはあるが、両者が同時に現れることもあり、判断する際にどちらに偏ってしまうこともあるため、どちらかがどちらかに先行して起こるとはいえない。例えば、A さんは日本人に「もう 1 回いいですか」と聞かれると、否定的な感情を抱くが、それはA さん自身がコミュニケーションが好きではないと感じたからであり、別に相手からの「もう 1 回聞く」という行動を悪く評価しているわけではない。

参考文献

Brislin, Richard W. (1981) *Cross-Cultural Encounters: Face-to-Face Interaction*, New York: Pergamon Press.

Brown, P., & Levinson, S. C. (1987) *Politeness: Some universals in language usage.* Cambridge University Press.

Hammersley, M. (1989) *The Dilemma of Qualitative Method: Herbert Blumer and the Chicago Tradition*, Routledge.（マーティン・ハマーズリー　谷川嘉浩（訳）（2022）『質的社会調査のジレンマ　ハーバート・ブルーマーとシカゴ社会学の伝統　下巻』，勁草書房.）

岩男寿美子・萩原滋（1997）「在日留学生の対日イメージ（12）第 3 次調査（1995 年）の枠組みと結果の概要」，『慶応義塾大学新聞研究所年報』，47，1-20.

葛文綺（2019）『中国人留学生・研修生の異文化適応』，溪水社.

小柳志津（2006）『感情心理学からの文化接触研究―在豪日本人留学生と在日アジア系留学生との面接から―』，風間書房.

Lysgaard, S. (1955) Adjustment in a foreign society: Norwegian Fulbright grantees visiting the United States. *International Social Science Bulletin*, 7, 45-51.

佐々木ひとみ・水野治久（2000）「外国人研修生の異文化適応に関する縦断的分析」，『日本国際センター紀要』，10，1-16.

Shaules, J. (2007) *Deep Culture: The Hidden Challenges of Global Living*, Clevedon: Multilingual Matters.

鈴木京子（2015）「人間的成長の観点から見た異文化適応概念の再考論―教員の異文化体験の分析から―」，『異文化間教育 』，42，59-74.

田中共子（1998）「在日留学生の異文化適応：ソーシャル・サポート・ネットワーク研究の視点から」，『教育心理学年報』，37，143-152.

山本多喜司（研究代表者）（1986）『異文化環境への適応に関する環境心理学的研究』，昭和 60 年度科学研究費補助金（一般研究 B）研究成果報告書.

Znaniecki, F. (1934) *The Method of Sociology*, Farrar & Rinehart.（F. ズナニエッキー　下田直春（訳）（1971）『社会学の方法』，新泉社.）